

# 大学生と向き合った1260分

## ——市民協働による公共サービス再生をめざして

公共サービスの重要性和労働組合の役割への認識を深めるため、自治労は2009年から明治大学で寄附講座を開講し、今年で2年目となる。13講座・1260分の対話で私達は何を学んだか。

4月27日ナース服で講義する兵庫県市立伊丹病院の看護師の松丸重子さん



### ＊寄附講座とは？

自治労は2009年から明治大学において寄附講座を行なっている。今年も全学部の共通講座として全13回開講され、遠藤公嗣教授のコーディネートの下、毎回、自治労の仲間が交替で教壇に立った。修了生には正式な単位も付与される。公務員志望の大学生にとっても地方自治体の職場を知りたい機会にもなる。さらに講義の中で「財政危機」「人員削減」「臨時・非常勤問題」「団結権・ストライキ」等、自治労やそこに集う仲間が直面している諸問題にあえて踏み込むことで、それらの解決策についてもいっしょに考えてもらう対話の機会ともなっている。

以下紹介するのは、今夏、講座を受講した学生さんからいただいた貴重なコメントの一部をまとめたものである。

### ＊知られていない公務員像

「消防職について」人の命とここまで深く関わる仕事に携わる方がどれだけ本気で真剣にやっているかが、この90分間でものすごく伝わってきた(3年)「休み間もなく働いている医療従事者の方々には私には決

してできない仕事だと思ってしまうですが、本当に感謝しています(4年)。

一番多かつたのがこの種の感動を率直に書いた意見だ。

実際、彼らは「公務員の仕事は事務作業が多く、自分の仕事をやればよいという風土である(4年)」と思っていたらしく、やはりマスコミ等で流されている「昔ながらの公務員のイメージ(3年)」に感化されている点は否めない。それを多少なりとも払拭できたという点では、この講座の初期の目的は十分達成されたと思われる。

さらに「水資源の保護」「環境問題」から「自治研」「平和運動」まで実に多くのことに自治体職員や労働組合が関わっていることは大きな驚きをもって迎えられたようだ。やはり現場を持つ私たちの生の声は強いと感じた瞬間だ。

### ＊危機の時代に……

また自治体や公共サービスをめぐる諸課題についても、各講師の現場からの声はストレートに届いている。

「臨時・非常勤問題について」いつ更新が止められるのかという不安にいつもかられて働くのは、とても精神的につらいものがあ



6月1日作業服で講義する大阪市建設局南工場の引地正司さん

ると思いました(4年)「生活保護という制度に今は自分自身縁がないものの、今日のお話を聞いて自分の将来を考えて不安になりました(4年)」「保育政策について」この分野は国の将来に関わることであることは明白であるのに、国はその意識に欠けているように見受けられます(3年)。

たとえば、2009年来大きな話題となっている基地問題についてもやはり関心が高い様子で「(国のアメとムチの政策について)自治体はその予算の使い方やモラルとの狭間で行き詰っているのを感じた(4年)」と、基地を抱えるまちのジレンマ・苦悩にも理解を示している。何事もきれいに済ませず、地方行政や公共サービスの危機

◆寄附講座のカリキュラム

講義内容	
4月13日	ガイダンス
4月20日	消防職員の活動と地方自治体の責任
4月27日	医療の危機と看護職員の取り組み
5月11日	子育て支援の保育現場での取り組み
5月18日	労働者の権利擁護と公共サービスの拡充のめざす地方自治体の労働組合の役割
5月25日	自治体の不安定雇用労働者・臨時非常勤労働者の現状と労組の活動
6月1日	街の環境整備でつながる市民と自治体～地域の新しい道路行政を考える
6月8日	平和と地方自治体の役割と実践
6月15日	環境保護と地方自治体の責任
6月22日	地方におけるまちづくりと公務員
6月29日	セーフティネットと地方自治体、生活保護の行政は今
7月6日	働くものの権利擁護と労働組合、組合の役割と日常の活動
7月13日	地方自治体の関連職場で働く民間労働者の現状と雇用確保の取り組み

的な状況等も包み隠さず提示することは、自治体の実施する出前講座等ではできない、自治労の寄附講座だからこそできた一つの成果点だ。日頃の対住民業務においても重要なことであるとあらためて教えられた思っている。

＊デモ・政治活動への疑問

一方、これらの危機的な状況に対する自治労側の取り組みについては、「お話を聞いて多くの取り組みをしていることがわかった。しかしその取り組みについての成果が私たち市民にとっていまひとつ体感できない(3年)」との声も。

とくにデモなどの行動や政治活動について、「少なくとも国内ではこうした運動がまだまだ支持を得られておらず(中略)、少し急ぎすぎている感があるようにも見えることが多く、現実から乖離しているようにも感じます(3年)」というような醒めた反応があったことも事実なのだ。「政治的な決定に関しては、政府や地方議会の判断が優先されるのが当然である。職員が関与する

べきことではない(4年)」とは、脱官僚を叫ぶ政治家にも通じるモットーであるだけに、これらの疑問から逃げずにどうわかりやすく答えるべきか、自治労として、各職場として早急かつ真剣に議論すべき時期ではないだろうか。

＊協働のパートナーとして

その意味では各地の「市民協働」の報告は、職員ならではの取り組み事例としても、今後の公共サービスがめざす方向性として、学生の間で新たな気づきにつながったようだ。「大阪の自転車整理の事例について」市民の方々の協力でこんなに変化するものだ知り驚き、少しのことでも市民ができることは多くあると思いました(4年)。「協働にあたって(公務員が市民に信頼してもらおう)のではなく、(公務員が市民を信頼する)という考え方の変化が、非常に斬新で画期的だとも思いました(3年)」。何よりもたった90分の講義で「市民を先導する役割としての行政、市民を支援する役割としての行政。その2つの役割を行政がバ



明治大学経営学部 遠藤教授も交えて次年度に向けて総括会議を行った(2010/8/1)

ランスよく果たすことの重要性・難しさを痛感した(4年)」というような卓越した認識を持つてくれた学生がいたことは驚くべきことだろう(翻って、我々は?)。

さらに協働に関わる職員には「市民と行政の間に立っているような自治労の役割や必要性を感じることができました(4年)」  
 「新しい公共によって見直される公務員と市民のあり方がすてきだと思いました。ぜひ実現されることを願います(4年)」等のメールも多数寄せられた。日々、現場で苦闘し続ける私たちにあってこれらに勝るメッセージはないだろう。

＊対話の中から

一般の学生にとつては、まだまだ公共サービスは遠い存在かもしれない。しかし、組合員からの直接の呼びかけに触れたことで、それを自分の課題として捉えてもくれている。

「(保育問題について)広い問題ですが、自身も何かできないか考えたい(4年)」  
 「(医療看護の現場の現状について)私も、友人知人に伝えていきたいと思えます(4年)」  
 「水環境を守るためには、法制度の整備だけでなく、私たち一人ひとりの意識を変えることが、未来を見据えて思考・行動することが重要なのだと思った(4年)」。

実際、最初は「(自治労は)恵まれた立場(4年)」と現実の社会・職場からの乖離を指摘していたある学生が、講義の回が進むにつれ「自分の住んでいる地域はどうなっているか、興味を持ってました。区の広報紙などに目を向けるようにしたいです」と意識が変わってきた例もある。

一見、何事にも無関心・無感動を装うように見える若者たちだが、予想以上にまっすぐ私たちの思いを受けとめてくれたというのが、教壇に立たせてもらった講師一同の偽らざる感想だ。

100年ほど前、明治大学の創始者のひとりである矢代操氏(福井県鯖江市出身)は、こう述べたと言う。

「教ユルハ学フノ半ナリ(教えるという行為は、学ぶという行為の途中＝一過程に過ぎない)」

そうであつてみれば「自治体の方々がこれほど市民のことを考えて下さっているということに驚いた(3年)」  
 「改めて組合は大切であるという呼びかけ運動は、とてもすばらしい(3年)」という彼らの声を聞くことができた私たちの側こそ、学生さんから教えられたものは多かつたのではないだろうか。

※引用文末の(3年等)は、3年生の意見であることを示す。